

# 幼稚園における自閉スペクトラム症児に対する社会的遊びの支援

保育現場における遊び支援のためのフォーマットの作成に向けて

○藤原あや

園山繁樹

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症、社会的遊び、幼稚園

## I. 問題と目的

自閉スペクトラム児は、共同注意や模倣、社会的刺激に対する反応に困難をもつため、社会的遊びに遅れが見られる (Bass & Mulick, 2007)。そのため、日常の保育や教育場面における遊び支援が必要とされる (Liber et al., 2008)。しかし、遊びの介入における遊びの選定は、子どもの遊びの状態の観察を通して行う以外は、どのように選定したかが明らかでないことが指摘されている (Lifter et al., 2011)。そこで本研究では、保育現場における遊び支援のための遊びの選定条件を検討するため、対象児の好み・ルール理解・運動スキル、他児の好みに加え、対象児が参加しやすい活動の特徴に基づき遊びを選定し支援を実施した。そして、これらの条件に基づく遊び支援の効果を検討することを目的とした。

## II. 方法

**対象児:** 自閉スペクトラム症と知的障害のある5歳1か月男児1名 (以下A児)。週に3回幼稚園に通園し、他の日は療育施設に通った。また、週に1回大学の教育相談室に来談。4歳10か月時の発達年齢は1歳10か月、発達指数38 (新版K式発達検査 2001)。研究開始時、言葉によるコミュニケーションはなく、クレーンでの要求が主であった。集団活動においては、その場にいることもあったが、途中で寝そべったり、部屋を出て行くこともあった。歌や音楽が始まると、しばしば耳をふさいでいた。遊びは、身体遊びや砂を上から落とすなど感覚的な活動に従事し、他児とのかかわりはほとんどなかった。

**支援期間と支援場所:** X年1月～3月にかけて、A児が在籍する幼稚園の室内自由遊び場面において週に1～2日 (1～2回/日) 実施した。支援実施者は、A児のクラスの担任1名、介助員2名及び第一筆者であった。

**遊びのアセスメントと選定:** 【観察】 標的となる遊びを選定するため、室内での自由遊びを観察した。A児は、箱に入ったビーズをすくったり、落としたりして遊んだ。ビーズ以外の遊びを自分から始めることはなく、担任や介助員が遊び道具を提示したり、遊んで見せたりすると1～2回は従事できた。他児とのかかわりは少なく、他児がA児に「ビーズ貸して」と言ったり、落ちたビーズを拾ってA児に渡したりすることはあった。A児が他児と一緒に遊ぶことはなかったが、他児に抱き着いたり、頬を触ったりする様子が見られ始めていた。【アンケート】 社会的遊びスキルの段階を評価するため Play Observation Sheets (White, 2010) の翻訳を使って担任と介助員が評価した。【聞き取り】 室内ではビーズ、外遊びでは砂を触って遊ぶことが多い。体操教室では他児と一緒に参加できるとのことであった。【遊びの選定】 担任と話し合い、A児が参加しやすい体を動かす要素があり、物を転がすという好きな活動を含み、他児とのかかわる機会があることから、滑り台からボールを転がしたり、友だちが転がしたボールをキャッチしたりする「ボール転がし」を標的遊びとした。

**道具:** 巧技台、滑り台、カラーボール、バケツ

**ボール転がしに必要なスキル:** ①ボールを転がす②滑り台を滑る③ボールをキャッチ/拾う④滑り台に戻る

**従属変数:** ボール転がしスキルの正反応率と自由遊び 30分間における他児と道具を共有しかかわりながら遊ぶ時間  
**手続き:** 【BL】 通常の遊び道具を設定し担任や介助員が通常の支援を行った。【ボール転がしスキル獲得のための支援】 通常の遊び道具と滑り台とボールを設定し、自由遊び時間内に一度はA児を「ボール転がし」に誘い、従事できるようガイダンスやプロンプトを行った。遊び相手は、クラスの子ども2～3名であった。セッション1では、第一筆者がガイダンスやプロンプト、強化のモデルを見せた。セッション2以降は、基本的に介助員が支援した。また、3セッション目からボールをキャッチから拾ってバケツに入れるに変更した。正反応率80%が3回連続で達成とした。  
**【ボール転がしの設定】** 通常の遊び道具と滑り台とボールを設定し担任や介助員が支援を行った。

## III. 結果

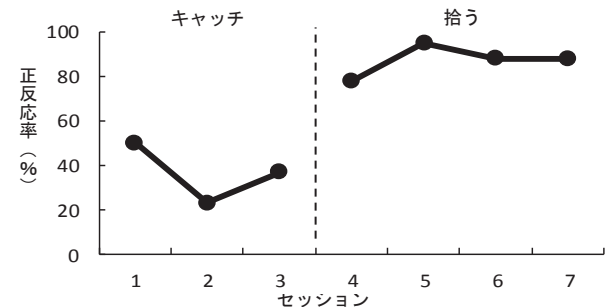


Fig.1 ボール転がしスキル獲得のための支援におけるスキルの推移

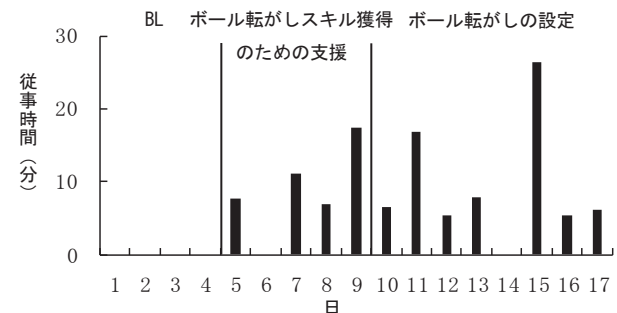


Fig.2 室内の自由遊び場面における他児との遊び時間

## IV. 考察

対象児の好みや遊びスキル、参加しやすい活動の特徴に基づいて遊びを選定することで、対象児は遊びスキルを獲得し、他児とのかかわる遊びへの従事が可能となった。また、対象児がスキルを獲得した後、保育者が対象児を積極的にボール転がしに誘ったり、他の遊びを試したりするようになったことも他児との遊び時間が増えた要因と考えられる。今後は、これまでに得られた遊びの選定条件と選定に必要な調査項目を含めたフォーマットを作成し、その効果を検証する必要がある。

## 文献

Bass, J. D. & Mulick, J. A. (2007) Social play skill enhancement of children with autism using peers and sibilings as therapists. *Psychology in the School*, 44 (7), 727-735. (FUJIWARA Aya, SONOYAMA Shigeki)